

アラヤ壺奇譚



Grasshouse

寒空に覆われた十二月の日曜日、公園のフリーマーケットでまとめ買いをした本の中に、古びた黄褐色の古本が混じっていた。その書を手にしたのは、銀色に空が光っているようなどんよりとした日曜日の午後であった。

『鄭家直伝 夢壺秘法 一鄭英峰著 高木直親訳一』

私自身も、どうしてこんなものを買ったのかと訝るような書物で、戦前の台湾における印刷及び出版らしく、それはそれは色褪せた地味な装丁の私家版である。

ページは紙魚の跡だらけ。めくるとかすかに黴の匂いがしてくる。

旧かな使いの厳めしい文章で、ところどころに大日本帝国とか、阿片吸入者とか、高砂族、三合会（これは中国マフィアだ）などという、古い語彙が散見される。著者は、大陸、台湾、満州あたりを往復していた軍事探偵で、高木直親というのはペンネームだという。

軍事探偵という職業すら、今となっては死語であろう。これは昔のスパイ、工作員、謀略家の類である。満州や上海には、日本陸軍を背景として、こんな人種が跳梁跋扈していたものだ。大陸浪人などという言葉もある。しかしその多くは、どことも知れない黄土の地の果てで、淋しく野垂れ死にってしまった無念の輩だろう。

しかしこの高木という男が、本当に退役スパイだとしたら、そんな怖ろしい経歴を書物の中で公表するだろうか。

私が驚いたのは、神秘学めいた怪しげな文の途中に、里見甫という名前や、関東軍司令部の板垣征四郎、石原完爾の名前が出てきたことである。この里見とは、上海の阿片王の異名をとり、戦後右翼の黒幕となる児玉誉士夫のボスとして知られる男である。A級戦犯となった後、首相として返り咲く岸信介の同志でもあり、阿片の売買によって、軍の資金を支えた大物である。旧満州帝国は、岸の傑出した行政能力と、関東軍の軍事力、そして里見甫の集めた莫大な阿片資金により支えられたとあってよい。鄭英峰なる道士は、この稀代のフィクサーを「里見さん」と親しげに呼んでいる。いまの中国からすれば、売国奴である。

――その日は他に、私のような暇人の好きそうな本を、数冊ほど購入した。

ベルギー幻想派の美術書や、『カバラの象徴と儀式』という題の本である。私はカバラと呼ばれるユダヤ密教が、究極においては、単なる黒魔術の類ではないと思っているのだが、その確証がなかなかつかめない。原始キリスト教発生前後に、アレクサンドリアや地中海領域で蔓延っていたグノーシス派も、あながち暗黒面ばかりではなかろうと思う。ただしデミウルゴスという二流の神の概念が、厄介なのである。真実の神の偽物であるところの造物主とは、いったい何か。それはむしろ創造神というよりも、潜在意識に巣くう魂の怪物、いわば魔性の類だ。どの思想も哲学も、光と闇、聖と魔の両極性がある。しかし、カバラもグノーシス派も、日本では信頼できる本になかなかお目にかかれない。こんなことをいつている私は、いわゆる好事家の類であり、謎めいた物事に傾斜することで、人生の労苦を忘れたいたいという小心な卑怯者であるにちがいない

時間の止まったような世界に住んでいる私には、ときどき近くの広場で開催されるささやかな市で、ちょっとした買い物をする愉しみがあつた。

そこは我が家からもほど近い団地の外れ、かなり太い楠の木の緑陰に囲まれた好ましい一画で、花壇を囲んで綺麗に煉瓦が敷きつめられてある。よく晴れた秋の午後などは、透明に澄んだ光線がこの木々を金色に染め、影は青紫に染まり、じつに麗しい水彩画のような光景となる。

天气に恵まれた盛況の時は、パリ北のクリニャンクールの蚤の市よろしく、露店と露店が狭苦しく立て込んで、小道具が山積みになり、狭いながらもごった返しになってしまう。ここに来ると、東京にもまだ、雑然とした無秩序の美しさが残っていると安心できる。

客は近隣に住む主婦が多いが、意外に若い女の子たちが集まるのは、センスのいい古着店が幾つか出店するからだろう。それにしても、ある時期から彼女たちの服装の感覚が、際立って良くなってきたことに驚かされる。安っぽい布きれを組み合わせ、魅力的にコーディネートしてしまうのは、日本の少女たちの天性の才能だ。フランスやニューヨークの最先端のデザイナーがお忍びで東京にやって来て、彼女たちの感性を盗みに来るといふ噂も、あながち嘘ではあるまい。

私は、早くに妻を乳癌で亡くした。

妻の律子は気丈な性格で、共働きをしていたせいも、私に心配させまいと長いこと私に病気を隠していた。おそらく、小心者の宿六は、おろおろとうろたえるに決まっていると踏んだのだろう。かなり進行してから、医者 of 強い薦めにより、ハルステッド療法という、残酷な外科手術を施した。片方の乳房と筋肉を丸ごと切り取ってしまうという、現在では行われることのない手術である。その甲斐もなく、程なくして骨に癌が転移してしまい、取り返しのつかないことになった。

それでも律子は、泣き言をいわなかった。私とは五歳離れていたが、精神年齢では、終始向こうの方が上であつたと思う。二人の間に子供はできなかった。彼女はそれも秘かに苦にしていた。晩秋の雨の晩、律子は亡くなった。

律子の死からほどなくして、人生への落胆と無気力から、私は中学教師を辞めた。担当は英語だったが、毎年、気苦勞の多い担任も任された。せつかく公務員になつたのだから、もう少し我慢をして在籍していれば、私とていろいろと良いことはあつた筈なのだが。年々劣化してゆく職員室の雰囲気が居たたまれなかつたのだ。

ほんとうに世の終わりが近いのか、ある時期から生徒もますます残忍な小鬼のようになっていくし、それ以上に教師たちも無気力化し、学校全体が教育の場とも思えぬような荒廃した空間となり果てていた。これはどうやら、欧米でも似たような殺伐ぶりで、世界的な兆候らしい。やる気のある若い教師も、この環境では化学肥料漬けになつた作物のように、一年もせぬ間に、ずぶずぶに根腐りしてしまう。

ある月曜日、校長の退屈な朝礼の前に、畏まって一列に立っている教師どもの生気を失つた灰色の影のような姿を見た瞬間、ホラー映画のゾンビの群れを連想した。

もちろん、律子を失い個人的な失意に沈み込み、青ざめた顔をしていた私自身も、その亡霊の

一人なのであるが。

その三か月後、辞表を出した。

一応、校長と教頭には、ご挨拶程度に引き留められたものの、さしてしつこくは、問われなかった。教頭に到っては「まあ、最近では、帰国子女の生徒の方が、英会話の発音は上手いくらいですからねえ」と、厭味までいった。私は、心の病を抱えた者として、すでに同僚には見放されていたのだ。一抹の寂しさとともにも、安堵感があった。彼らには彼らの生活があり、私には私の人生がある。半年ほどぼんやりしてから、先輩の伝手を辿って、塾の教師や知り合いの子供の家庭教師をしながら、投げやりな世捨て人のようにほそぼそと生きてきた。優しいだけが取り柄の老いぼれた元教育者である。

とはいえ、社会的に投げやりであることが、そのまま人生に対して投げやりであるとはいえない。私は子供の頃から、手品師が幕を開いて種明かしをしてくれるように、いつかこの世の秘密というものが分かる驚くべき瞬間が来るのではないかと信じてきた。

こうして性懲りもなく、骨董屋、古本屋、フリーマーケットに立ち止まるのも、この世の秘密の構造を解いてくれる何か新たな手掛かりがあるのではないかという、そこはかとない期待によるものである。

しかし今となっては、そのささやかな希望も、一筋の細い煙をくゆらせているだけである。いわば、法に触れぬ程度の悪癖を重ねて、何くわぬ顔をして生きているだけの世捨て人である。この世で私にふさわしいのは、隠者という役割かも知れない。山に籠もるような脱俗的かつ潔癖な求道者ではなく、いい加減な市井の隠者である。いまの時代にその種の人間が絶えているなら、私が市井の隠者という人種になってやろうと思った。こういった人間の好む読書は、大方相場が決まっているものだ。前世紀末フランスあたりの退廃的な耽美派文学や、ゴシック・ロマンの類。例えばユイスマンスや、G.マイリンク、そして渋澤龍彦や三島由紀夫に影響を与えたといわれる日夏耿之介の繊細晦渋な詩文など。つまり健全な読書士からは逃避文学といわれるような世界である。

――さてさて、どうも私の話は回りくどくていけない。

自慢ではないが、子供達にも先生の授業は展開が下手だとよくいわれたものである。私は早くあの『夢壺秘法』という謎めいた本にまつわる私の奇妙な体験について書きたいのだが、ねっとりした泥沼で藻掻いているようで、なかなか目的地に辿りつけない。その体験に加え、私がいまこの世界でどんな状態に嵌り込んでいるのかを、まだ思考力の残っている間に、誰かに伝えたいのである。

マーケットが開かれる場所は、住宅街に囲まれた小学校の隣の公園で、いつもは冬枯れの木の中に囲まれて閑散としている空き地だった。

しかし、こんなイベントが開催される時は、色とりどりの粗末な屋台も出たりして、時には遠くから人々の甲高い笑い声も聞こえてくる。

冬の樹木の枝々は、銀色の錐の先のように尖って見えた。

その枝のひとつに鴉が一羽とまって、黒紫色の翼を半開きにして、ときどき唳れた声で鳴いている。私が見上げると、ばさり、ばさりと羽を上下させ、屋根の向こうに消えてしまった。

北風が強くて、新聞紙が枝の方まで巻き上がり、マフラーを深めに巻き直して冷たい風を避けた。このカシミアのマフラーは、亡くなった律子が私の誕生日にプレゼントしてくれたもので、いまでも大切に使っている品であった。その日も出かけるときにどこにしまったか忘れてしまい、ハタと思い至って、やっと奥の箆笥から引っ張り出してきたものである。まさか六十代前半で惚けてしまうとは、さすがに自分でも考えたくはないものだ。

雪が降りそうな寒さのためか、思ったほどフリーマーケットには客も集まっていなかったが、ここでは常連の屋台のラーメン屋は白い湯気をもうもうと吐き出して、カップルや家族連れの人気を集め、繁盛していた。

学生時代から、神田周辺の本屋めぐりの好きな私は、一冊の変った装丁の黄色い本を手にしてばらばらめくっているうち、何か尋常ではない気配を漂わせているのに気がついた。

——その本は、台湾の出版物の日本語訳らしかった。

デザインや書体が、日本の出版物とは全然違うので興味をそそられ、大して中身も確かめずに買ってしまった。以前、訪れた台北の有名な誠品書店の知的で落ち着いた雰囲気を出したせいでもある。高価ではなかった。

『鄭家直伝 夢壺秘法』の著者は、「鄭家十二代導師 鄭英峰 訳者 高木直親」とあった。奥付を見ると1941年と記してある。おそらくは小部数の私家版として作られた本だろう。訳者の後書きでは、高木氏は昭和十年代に日本の軍事探偵として大陸に渡り、後に上海で鄭英峰師と出会って生涯の師と仰ぎ、戦後台湾の本家で道教寺院の弟子として迎えられたという。この本は、鄭師の原文の和訳に加えて、直接の聞き語りを追加した内容とのこと。道教寺院の組織で紅卍会というのを聞いたことがあるがその系統でもないらしい。男のくせに冷え性の気がある私は、いささか寒くなってきたので、古本を数冊と筆入れに使えるような地味な焼き物を買って、いそいそと戻ってきた。

年越しの慌ただしさの中、しばらくその本は放っておいた。

正月に入って、そろそろ落ち着いてきた頃になった。

家族のいない私には、辛い季節だ。

その日は寒空がしだいに暗くなり、雲がちらちらと薄鼠色の空に舞っていた。

人一倍寒がりの私は、午後、ホットカーペットとヒーターをつけて、さっそく二階の部屋を暖めにかかった。そしていつものようにダージリンの濃い紅茶を淹れる。

体を温めるために、手をさすりつつ、少しブランデーを混ぜてみた。

CDを選んでスイッチを入れると、ブラームスの弦楽五重奏曲が始った。

私は、ベートーベンほど激しく熱情的ではないが、精緻な音の配置で燻し銀のような魅力のあるブラームスの室内楽が好きなのだ。ベートーベンが北斎のような力を持っているとしたなら、ブラームスは雪舟の墨絵であろうか。……昔そんなようなことを律子にいったら、私よりもクラシックに詳しい彼女は、侮蔑したようにくすりと短く笑って、何もいわなかったが。

音楽を聞きながら、その黄褐色の本を仔細にめくってみた。

私は中国流の夢占いか何かの本だと思ったので、初夢を占うにはいいだろうぐらいの軽い感覚で、その日になって思い出したのである。

幸運を説く本としては、どこか違和感がある。

何ページかめくると、奇妙な人体図が描かれてあった。

北斗七星を中心とした星座と人間の各部位との関係も細かく描れていた。

こんな絵が入っていたのには気がつかなかった。

内臓の健康状態と、夢との関係、食物や漢方薬と夢との関係。陰陽の気の巡りと仙術の小周天の修法についても詳細に説かれてあった。食を少なめにすることで、明晰夢が得られるという。夢とは環境と意識とが融け合っている次元だという。また、自在に夢をカラフルにする術なども記されていた。どうやら中国古代から伝わる練丹術か、仙術の秘法らしい。

面白かったのは「淫吸羽師、殺吸羽師の法」というセクシュアルな秘法だった。これは夢の密儀を用いて、生きながら夢魔と化し、異性と交わる法である。

いってみれば、霊界を彷徨う不浄仏霊の救いのない悪さのようなものだろう。

淫吸羽師は男性夢魔、殺吸羽師は女性夢魔ということになり、それぞれ微妙に方法が異なる。失敗すると、最悪の場合は肉体の方も衰弱して、ついには免疫を低下させて病死するらしい。

——待てよ、と私は考えた。

これは、西欧の悪魔学やオカルトでいうところのインキュバスとサッキュバスのことではないか。何のことはない。馬鹿げた駄洒落だ。読者の無知を見越して、このふざけた著者はからかっているのではないだろうか。

偽書の疑いが強くなった。

ことによると、鄭英峰も、高木直親も存在せず、気まぐれな売文屋が二束三文で当時の軍属たちに売りつけた安っぽいフィクションの類ではないのか。

とはいうものの、各所には奇妙な説得力があり、著者は何らかの特殊体験をしているようでもあった。このような行為を行った場合、各々の実践者の「死後については一切関知しない」という脅迫めいた忠告も、恐ろしげな感じがした。著者は何事かの生命の密儀に通じているらしい。未熟なままにこの種の霊的法に打ち込み過ぎると、己の魂を他界に潜む霊的な生き物の餌食にされてしまうというのだ。まともに成仏したり健全な転生を獲得することが不可能になるらしい。

「桃花幻法——夢を現実界に、桃の花を植えるように造型していく方法」

これは一種の成功術らしかった。自分の生活を桃源郷のようにしていくテクニックだ。ある望みを一心に念じたあと、結果を期待をしないままで意識下に植え付けておくというのには、なかなか説得力があった。期待し執着し過ぎると「花が根となり、根が花となる」つまり、望みとは反対の結果が生じるという。私にも思い当たる節がある。真実であるならばぜひ修得したい術で

ある。しかしこれは比較的一般向けの術のようだ。

「精龍幻法——」

これはなんと、狙いを定めた女の子宮に宿り、その女の子供として生まれる秘儀だそうだ。横恋慕している女と、恋敵の男とが交わっている間に、放出した精子を乗っ取るのだという。この術に習熟すると、そのまま彼女の胎内に宿ることが可能になるというから、凄まじい。その際、ライバル男性と思いを寄せた女とが絡んだ生々しい裸身に、決して嫉妬や怒りを感じてはいけないという。

月と太極と星辰、つまり月齢や北極星、北斗七星などの天空の運行を計算しながら、受精卵を強引にハイジャックする秘術らしい。この秘儀を行うには、受精直後が理想だが、少し遅れても胎児が「小さな魚の形」をした程度の状態であれば、何とか寄生は可能だそうだ。ご丁寧なことに、鰓のある稚魚の絵まで描いてある。ただその場合、胎児として宿っている先着の魂を、犠牲にするのだという。その殺生の業は、次の生で刈り取ることになるので、相当な覚悟が必要とのことである。つまり来世は、墮胎か奇形としての生を宿命とするのだ。とはいえ、惚れた女の子宮に十月ほどいられるのだから、これは例えようもない至福の境地だそうである。愛する女の桃色の肉に包まれ、彼女がいつも下腹部を撫でつつ、母としての優しい声をかけてくれる。お腹の赤ん坊と化した自分中心に生活を始めるので、それはもう、このまま永遠に生まれなくてもいいと思うほどの喜びと陶醉境らしい。しかし平凡な日本人である私には、これはもはや、男女の性愛とも著しく違った退廃の極みではないかと、訝かしく思う。もともとこの秘技は清の時代に大成され、古くは諸侯や貴族たちの継承権争いや、金満家の子息として生まれるために使われたという。いかにも中国人らしい発想のような気もするが、何しろあの纏足を生み出した民族でもあり、奇妙な願望もあったものだと思う。

しかし、ことさらに他の方法とは区別されて特別扱いされている章があった。

それが「鄭家直伝 夢壺秘法」の極意を述べた章なのであった。

「まずは部屋の中で貴方ひとりだけになり、呼吸を静かにして、寝台に横たわりましょう。次に目を閉じて、下方へと向かう、暗い階段を思い浮かべてください」

私は『夢壺秘法』の実践編の章を開いた。

書物を買ってから、すでに二三週間は経った頃である。

幸いその日は、仕事や来客の予定はなかった。公立学校の教師を辞めて、小中学生相手の塾の英語講師を生業としてはいるが、第一線を外されている私の場合、授業も来週からであった。

私は書物を開いたまま、さっそく、カーテンを閉めて横たわることにした。

電気も消して、ベッド脇の小さな照明だけにした。

「北方を頭にして、枕の数センチ北に、掌に入るぐらいの小さな陶器を置いて横たわりなさい。金属製でなければ、どのような器でもよいのですが、小さくて先の窄まった形のものが理想です」

適当な器がないので、私は益子焼きの古い器を枕のそばに置いた。加湿器も白い蒸気を発して、すでに部屋はいい具合に温まっている。

「本を貴殿の心臓の真上に乗せて、地下へと続く暗い階段をイメージしてください」

書かれてある通り、心臓の上に重ねてみた。

気のせいか、書物の重みが次第に増していくように感じられた。厚みのある鉄の板のように、ずっしりと肋骨を圧迫してくる。

これは、気味の悪い本である。

この圧力は、妻の死の直後の鬱病期に、毎晩体験した金縛りによく似ている。はたしてこの胸苦しきは、紅茶に混ぜたブランデーが利いたのか。普段の意識されざるストレスのためなのか。

一瞬、何か目の前を、冷たい水のような空気が覆った気がした。

と、いきなり私の目の前に、地下へと続く灰暗い階段が、鮮明に出現した。

それは、暗青色の蛇腹を大きく前に投げ出したような、建築的な映像であった。

じっと注視している間に、細部がみしみしと出来上がり、ラピスラズリのような藍色に変容した。ぬめぬめとした蛇のような感触のある階段である。

どうやらこの入眠幻覚の世界は、注視することに秘密の力があるらしい。意識を向けると、細部があれよあれよという間に、見事なまでに整い始める。私の発する意識そのものに、触覚的な方向性と、流動的なエネルギーが感じられる。

私は、寝たままの格好だ。

地下といっても、目の前に斜めに広がっているのだから、物理的にいえば下方ではなく、前面上方である。

ちょうど塾の子供たちがやっているゲームのような感触だった。あれはロール・プレイング・ゲームというらしい。ひとつの仮想空間の中に分身をもうけ、果てしのない探究をするのである。随分以前、家庭教師をやっている子供が夢中になっているのを試させてもらった。特殊な

反射神経が必要なのか、なかなかうまくいかなかった。

唐突すぎるだが、私はそのときドイツの哲学者ハイデッカーの「世界〈内〉存在」という言葉を連想した。心が固有の世界を設定して、その内部で生きていること。人の意識というものは、繭のような空間の中で夢を見つつ呼吸していること。純粹に客観的な物理世界など、どこにも存在しない。世界とは、常にそこに立ち会って鼻先をつきつけている誰か個人の世界なのだ。しかも私たちは、この世という水槽の中に産み落とされただけではなく、さらに映画やテレビやゲームといった窓の中に首をつっこみ、二重三重に迷いを重ねる。そういった、とりとめもない連想である。

ただ、この入眠幻覚の実験が、子供達のゲームと違うのは、私自身がその空間の中にすっぽりと入ってしまい、永遠に出てこれなくなるような肉体的恐怖があったことだ。

しばらくしてから私は、異様な不安に襲われた。

部屋を見上げると、閉じられたカーテンはちゃんと見えるし、すぐ脇にはベッドの灰色のシーツも見えている。

片手を伸ばせば、そのシーツの布地のざらついた冷たい感触を、指先で感じ取ることもできた。己の脳のまやかし、つまり幻覚を相手にするには、現実の触覚的確認を絶えず怠らないことだと思った。

意外にも、私は冷静だった。

これは本当のリアリティではない。リアリティというものには、どうやら多重の領域があるらしい。光源の異なる二つの映写機の映像が重なったまま、私の意識の内部において、半透明の希薄な像を結んでいるのだ。

私は、昔読んだプラトンの『国家』の中の「洞窟の比喩」とは、まさしくこのことではないかと思いついた。人間とはすべて洞窟の中に座った囚人のようなものであり、背後から炎に照らされ、正面の洞窟の壁に映る幻影を見させられているに過ぎない、この世の知覚はすべて錯覚なのだ――というあの有名な寓話である。

ところで下へ続く階段の映像は、目の前に存在したまま、視覚的には一向に消えてくれないのであった。舌先に味覚が残っているように、物理的な映像と入眠幻覚の映像が、二重に重なって見える。意識の焦点の合わせ方ひとつで、どちらかの世界が自然にむくむくと肥え太り、押さえようもなく強固になってしまう。嫌悪を感じれば感じるほど、それは実在感を増して、私の前に現存してしまうのだ。

つまり、目前で一つの世界が発生し、みるみるディテールが形成されてゆくのである。どういふことだ。何が起きているのか。これはひょっとして、われわれの内部に棲み潜むデミウルゴスそのものではないのか。われわれの心のこだわりや欲望そのものが、世界空間発生のも、まさしく動力になっているのかも知れない。

この時、恐怖に青ざめながらも、私は微かに思考力を働かせていたようだ。

両手を伸ばして大の字になっているにもかかわらず、いまにも前のめりになって、落ちていきそうである。上下感覚や重力のバランス感覚が、すでに混乱している。

いったい、読むだけで三半規管が狂う本など、聞いたことがない。

私は、互いに侵食しあう二つの半透明な空間の間で、静かに呼吸していた。

二つの空間は途中で重なり合い、影のような中間ゾーンをここに形成している。それはあたかも不吉で魔術的な映写機がどこかわからぬように設置されていて、何者かによって巧妙な映像処理が加えられ、化かされているような感じであった。

このままだと、私の意識は変調を来たしてしまいそうだ。いつまでもこんな幻覚が続くわけがない。

私は頬をぴしゃりと叩くと、意識を強く保持し、大声を出した。最初声が出にくかったが、何かつかえたものが外れて、いきなりきつい呻き声が飛び出した。

私はようやく体を起こし、半信半疑で次のページをめくった。

その本にはこう説かれていた。

「何があっても、混乱してはいけません。これはいにしへの先人達が通過した、細い細い道筋なのです。その階段を、一段一段、呼吸に合わせて降りて行きなさい。貴殿にはすでに何らかの異変が起きつつあるかも知れません。しかし、恐れなくて先に進んでください。ここまで来てしまった以上、恐怖の感情は禁物です」

中国語からの翻訳——この設定自体も相当に怪しく、偽書である可能性も強いのだが——のせいか、文体が多少舌足らずだった。ことによると、これら全ての戯言は、道士くずれの元軍事探偵・高木直親という男の作り事かも知れないのである。あるいは阿片吸引者の見た妄想の迷宮であろうか。

しかし、ふと気がつく、微かに聞こえていた外界の音が消えている。

そこは、ほとんど無音の洞窟の中のような深い世界だった。

藍色の暗い階段は、壁から染み出した地下水でひたひたと濡れているように見えた。

息苦しくなってきた。

不安と好奇心との取引きで、私は好奇心に、負けた。

この自分は、世界の探求者なのだ。そう思った途端、精神が分解するかも知れないような根源的恐怖に抗う力が湧いてきた。

この凡庸な味気ない人生において、私はずっと探ってきたのだ。この意識と世界が拮抗する微妙な狂気の空間で、ついにその秘密が正体を現すのではないだろうか。

階段をゆっくりと降り始めた。もう、あと戻りはできない。

周囲はみしみしと音を立てながら、いまやはっきりとした物質感のある重々しい灰色の石壁と化していた。冷やかな硬質な感触を、指でなぞることも出来る。

しかも、自分の片腕を見ると、驚いたことに、例の『鄭家直伝 夢壺秘法』を抱えている。先程までは、自分の部屋でこの本を開いていたのに。

再び、本を開く。

「一番下に、古い錆び付いた鉄の扉が現れることでしょう。そのとき、非常な恐怖感に襲われるかも知れません。しかし鉄の扉が見えたら、勇気を出して迷わずに開けることです。他のこと

は一切考えてはいけません。忠告しておきますが、ここで恐怖に巻かれ思考を分裂させることは、取り返しのつかないこととなります。魂が帰って来ることのできない暗黒次元の虜となります。鉄の扉はかなり重いものですが、力いっぱい開いてください。扉は必ず、開きます」

階段を降りきったとき、地の底に一人だけ置いていかれたような恐怖を感じた。

天井は、広大な虚無の広がる暗黒宇宙のように思われた。

私は、魂を締めつける黒い茨や楔のように増殖していく恐怖の感情を、じっと見つめた。すると、どす黒い茨や楔は、柔らかな植物の蔓のようにくねりつつ、哀しみのような薄紫の色合いに変化して、ゆっくりと周囲に拡散していった。

私はこの空間においては、感情さえ制御できれば、風景の質感はコントロールできるのではないかという、微かな予感を得た。

風景は、どこかの古城の地下のような、藍色と錆色の重苦しい石の回廊のようであった。威厳のある建物だ。

呼吸を整え歩いていくと、高さ二メートルほどの錆色の鉄の扉が現れた。

青黒い表面には、古代文字のような細かい模様が彫られてある。擦り切れてほとんど見えない。扉の端に、丸い金属の取っ手がついている。

その真鍮色の輪を握り締め、恐る恐る開いた。絶望的なまでに、ひどく重い。

すると、暗い水蒸気が、溢れるように流れ込んできた。

その白い霧が晴れると、奥には、薄暗い酒蔵のような部屋が見えた。

見上げると、低い天井のあちこちには、恐ろしく大きな蜘蛛の巣が灰色の厚い布のように張ってて、それがあちこちで気味悪く、だらりだらりと、ぶら下がっていた。

真ん中には、人が一人、膝を抱えて入り込めるような赤黒い壺が、どっしりと置かれてあった。

古代の遺跡から時折発掘される甕棺のようにも見える。

白い湯気が、石の床の上を這い進んでゆく。

中国の霊廟を思わせるような赤黒く剥げた石壁には、隸書のような平べったい文字が深く刻まれていた。

「阿頼耶壺」

アラヤツボ——私はなぜか知らないが、決定的な場所へ来てしまったと思った。

何かの争い事で、裁判所の入口階段を踏むことになってしまったときのように。壺は粘土の表面のようなこってりとした鈍い光沢があり、薄い灯りに宝玉のように照り輝いていた。

もうもうと視界を覆っていた蒸気が、晴れた。

驚いたことには、壺の脇には、手長猿のような小さな老人がしゃがんでいて、こちらを伺うようにじっと見ていた。

顔は険しくて眉は薄く、香港の阿片窟の廃人のように無表情だった。八十歳、ことによると九十歳はいつているかと思われるような年寄りだ。衣服も、毛沢東時代の中国の寒村の老人が着るような、色褪せた粗末な服であった。どこか酒倉の奥に棲みつく杜氏を連想させた。

小さな猿めいた老人は、何か呪文めいたものを低くつぶやきながら、長い柄を掻き回して、作

業を続けたた。

その眩きは、最初は中国語のようであったが、私が意識を刷り合わせると「トローリ、トロリ」といっているように聞こえた。

壺の表面には、あふれでた液体が幾重にもこびりつき発酵した鈍い光を放っていた。厚ぼったい縁には、固まった液体の跡が、スズメバチの巣のように褐色の貝殻状の模様になって光沢を帯びている。

「何をされているのですか」

私は圧倒されたまま、怖る怖る尋ねてみた。

重苦しい沈黙の中、天井からぼたぼたと白濁した水滴が垂れていた。

しばらくすると、じつとこちらを睨み、老人は答えた。

「つまらん仕事さ。あんたの夢を、調合しているのだよ。この地の底の夢の壺でな」

無愛想な年寄りだ。長い柄のような棒をゆっくりと掻き混ぜながら、老人は震える手で小さな柄杓を出して、虹色の液体をすくった。

「……トローリ、トロリ」

老人は呪文のように、その言葉を繰り返した。

「この壺の中の液体が、あんたの魂の、微妙な震えや、邪な気配を感じ取り、たちまち暮らしの中に幻の映像を、でっちあげるというわけさ。いわば夢の原液だ。私はその夢が他の夢とこびりついて凝縮しないように、こうしてときどき掻き混ぜているんだよ」

「それはどうも——」

私がいえるのは、それがせいっぱいだった。「ご苦労様です」

もし本当ならば、この老人は、私の人に言えないような欲望やプライバシーを、すべて細部まで知っているということになる。

「ひとくち、試してみるかね」

険しい顔をしたまま、老人は丁寧な口調になった。

その真珠色の液体は、柄の先端で糸を引いた。何ともいえないような色合いだった。

夢の原液はトロトロとすじを引きながら、かすかに甘い腐臭を放っていた。蜂蜜ほどの粘り気を持っているように思われた。

老人は、恐ろしい目をしていた。

子供のように小柄なのに、目の周辺だけは夥しい皺が寄り、きつい刺すような視線には、異様な凄みがある。しかし私はそれらすべてが当然のここのように思われ、薦められるまま、液体を舐めた。

舌先で、液を舐める。

くらりと、眩暈がした。強い酒に似た痺れがあった。

むっと湯気が吹きつけてくるような感覚があり、突然、目の前に、椰子の木がゆっくりと揺れている海辺の映像が現れた。葉陰の向こうには、オレンジ色の夕日に照らされた水平線の島々が連なっていた。常夏の楽園のようであった。

もうひとつ、舐めてみる。再び、意識が眩惑される。

今度は、鈍く輝く金色の玉葱のようなロシア正教の寺院が、朝霧の風景の中に灰色の影絵のように浮かび出た。グレゴリオ聖歌のような単調だが深い歌声が響いている。

私は感動していた。

もう一度夢の原液を舐めてみた。今度は両の乳房をむきだしにした裸の女が、薄ら笑いを浮かべ、腰を左右に動かす踊りを続けている。中近東あたりの異国の女らしい。私は、むっちりとした乳房にさわった。羅刹のような半裸体の女達は、うっすらと薄目を開き、半ば口を開いたまま、私の首に両腕を巻き付けてきた。焰めいた欲望がチロチロと湧いてくる中で、何が上下なのかわからなくなった。ぐるぐると回転する空間の中で無数の妖しい女たちが、魚の群れのように湧き出した。肉欲の渦がこれらの女たちの姿を生み出しているようであった。ふと気がつき、私は、ハツとして魔物のような老人を見た。隠された願望や欲望を顕わにされてはたまったものではない。

私は慌てて口を離すと、老人は見透かしたように暗く笑った。嘲笑しているような薄笑いであった。老人は、壺に突っ込んだままの長い柄を、弄んでいた。

しかし、次の瞬間、息を飲むようなことが起こったのである。

夢の原液の中心が、ぶつぶつと泡立ち、青白い蒸気が卵状に昇っていった。その渦はゆっくりと時計回りに回転し、一人の女の姿を象り始めた。はっきりと姿形をとる前に、亡くなった妻の律子であることを確信した。半透明の妻は、亡くなった三四歳の時のやつれきった容姿よりもはるかに若く、異常なまでに美しかった。細かい光の粒子のようなものが、その卵状の袋の周囲を静電気のように走っていた。

長い髪だけが、黒い焰のように靡いていた。

驚愕している私を前に、青白い光を放つ律子は、ゆっくりと顔をあげ、黒曜石のような瞳を私に向けた。

「あのカシミアのマフラーは、奥の箆笥の一番上の引き出しに、しまっています」

私は驚愕した。律子は、切れ長の目を大きく見開いた。

「あなたという人は、何度わたしが言い聞かせても、すっかり忘れてしまうのですね」

口惜しそうに下唇を噛みしめている。

「ああ」と、私は答えた。「そうだった。そうだったねえ」

白い女神彫刻のような像と、彼女の言葉のあまりの現実感に、私は戸惑うしかない。

「あのカシミアのマフラーは、箆筒の一番上の引き出しに、しまっています。だのにあなたは、いつも別のところを捜している。私から、遠い所を探しているのだわ。いったい、何を捜しているの？ わたしに秘密にして隠しておいたものかしら？ ……いつもいつも、わたしのいうことを真面目にとってくれない。だからわたしは、苦しい、苦しい、胸の病いになりました」

私は背筋が凍りついた。

「そうではないよ。誤解だ。そんなことはない」

背景には、砂嵐のような冷たい風が、ぼうぼうと吹き荒れていた。

砂嵐の吹く虚無の宇宙の最果てで、二人は不可思議な会話をしている。

「ほれ、ごらんささい。ここでは嘘をつくと、地平の果てから果てへ、砂嵐が吹くの。私のいうことなど、あなたは愚か者のいうことだと思っていたのです」

「そんなことはない」私は、悲しくなった。

妻は白い顔をあげた。怒りとともに、首が据わる。

「嘘、おっしやい。私は、貴方のせいで、こんなになってしまいました。さあ、目をそむけな
いで、見て！」

妻が両腕で薄い衣を剥いで、胸元を開いた。もはやその部分は、女の乳房というようなものではなく、腐爛して汚れた薔薇の園のような患部が現れた。薔薇の花に、大蟹が身を屈め、蜜を吸っているように見える。なるほどCancerなのだなど、私は感心した。すでにまともな思考力を失い、その神々しい薔薇の園にこそ、宇宙の神秘が宿されているように思われた。私が蟹の醜い筋肉を注視すると、まるみを失った裂目から、無数の飴色の蠍の子が群がり出てきて、身を反らしながら、ぽろぽろと剥がれ落ちてきた。

次々と落ちる蠍の子は、床の上で一瞬、失心する。しばらくすると、あわてて鋭い尾を反らし、鋏を開きながら、ぞろぞろ、ぞろぞろと、四方八方へ逃げてゆく。

なるほど、私自身もあいつの乳房にしがみつくと一匹の蠍に過ぎなかったのだなど、脳の片隅で頷いた。

「この際だからいっておきます。私のことを一瞬たりとも思い出さなかった日が、三五二十三日……。そして、他の女と過ごした夜が……」

そこまで亡妻がいいかけると、その声はいきなりどんよりと沈潜し、籠ったような老婆の声に変わっていた。青白い卵形の雲は、苦しげな黒い煙を吐き出し始めた。

「淋しい夜には、いつも添い寝してあげているではありませんか。若いときと同じように、してあげているではありませんか。それがあなたには、わからないのですか。恥ずかしくないのですか、あんな子供みたいな女と」

――妻が死んだあと、私の家に半年ほど通ってきた美希という娘がいた。

実はこの少女は、担任したクラスの教え子であった。職員室では、非行少女のように言われていたが、当時、両親の離婚で荒んでいたのを、私は知っていた。美希は高校一年で中退し、しばらくぶらぶらしてから、年齢を詐称して、近所のスナックでアルバイトをしていた。すでに私の方も学校を辞めていたので、客として通った。最初は店を辞めさせるつもりが、愚かなことに、

常連となってしまったのである。まさにミイラ捕りが……というやつである。

ある晩、他の客は帰り、店は二人だけになった。美希が妙な酔い方をしたので、介抱しながらアパートに連れていった。夜の淋しい雨が降った。すると、怖いといって泣きじゃくりながら、私の膝にしがみついた。この子は父親の愛情に飢えているのだと、私は思った。私は教え子を抱きかかえながら、雨の音を聞きつつ、一晩を過ごした。

美希は、食事の用意と掃除をしに来てくれた。最初は「先生のお手伝い」ということで、いかにも楽しそうであった。しかしそのうち一緒に住むような関係になった。体の関係ができると、私はその負い目を誤魔化すために、彼女に英会話を教えるようになった。教え子の肉体に溺れれば溺れるほど、私はできるだけ、教師、父の姿を演じていたのである。

「貴方が学校を辞めた本当の理由を、私が分からないとでも、思っているのですか」

律子の声は、審判のように威厳を持って、響いた。

凄まじい後悔の念が、私の全身を酔のように鋭く貫いた。その場できががくと膝が震え始め、泣き崩れた。

「私とは子供が出来なかったから、あの娘のお腹の中の子を、墮したのですね」

髪の毛が逆立った。もはや隠し立てはできなかった。

世間の手前、籍は入れないままで終わった。そのうち、美希は自分の心を奪う若い男を見つけた。黒い革ジャン姿の男である。初夏のある日、美希は男のバイクの後部座席に乗って、どこかへ行ってしまった。「先生にお借りした五万円は、いつか必ずお返しします」というメモを遺して。すでに私には、激しく嫉妬するだけのエネルギーも残っていなかった。しかし、それらすべては、遠い過去のことだ。

ふと見ると、砂嵐が消えている。

妻は胸をしまっていた。

辺りはしんとしていた。暗い冥府の果てのようだ。

「たまには、モーツァルトをかけてください」

「う、ああ」

心にやわらかな灯がともった。

生前、妻とは何度こんな他愛のない会話を交わしたことだろう。

「ブラームスばかりではなく、モーツァルトをかけてちょうだい。そう、何度もいっといたじゃないませんか。それがせめてものわたしへの供養です。クラリネット五重奏曲をかけて欲しいのです。私には、あれが必要なのです。心の休まる暇がありません」

「わ、わかった」

律子はまた、がくりと顔を前に垂らした。

幻が消えると、悲しみと荒廃感だけが、冷酷な石牢のような部屋に、いつまでも漂っていた。

顔をあげると、手の長い老人が、陰惨な笑顔をして、私を見ている。

「これ以上やると、あなたの精神が壊れてしまう」

「壊れる……。私の心は、もう随分以前から、壊れています。律子とはもう少し話したかったが。会えて良かったです。ありがとう」

あらためてこの小さな怪物に、お辞儀をした。

「ひとつ聞いておきたいのですが、あれは幽霊なのか。それとも、私自身の夢なのか」

小さな老人は、そっぽを向いた。

「それをいったら終わりだ。それは触れないことだ。きつくいわれている」

「誰から」

「誰でもよい。上の者からだ」

「……そうですか」

「ともかく、いつでもどこの世界でも、一は多く、多は一だ。覚えておけ」

「謎々ですか」

「この世もな。あの世もな。次の世もな」

奇妙な沈黙が続いた。

小さな老人は、おもむろに柄杓を持ち替えて、鋭い目で私を睨むと、

「あんた、この壺の中に入るかね、それとも、戻るかね」と、奇妙なことをいう。

「この夢の壺に沈めば、この世とあの世の一切の仕組みがわかる。ただし誰も戻ってきた者はいない。鄭家の歴代の道士たちも、己の夢の壺に身を沈め、羽化登仙した。しかし、それは理解の果ての魂の死滅を意味するかも知れぬ」

「魂の死……」

「わからん。本当のところは、誰にもわからん」

小男の老人は、疲れたように溜息をついた。

私はしきりに下から冷えてくるのを感じていた。

「もう長い間、ずっとこんな世の果てで、人間とも会わずに、こういう仕事をやっているんでね」

「この壺が、ひょっとして、子宮なのでは」

老人は、ぴくりと眉を上げた。なにか、怒っているようだ。

私は背伸びをして、夢の壺を、アラヤツボを、覗き見た。

いきなり私は、老人に首根っこを押さえつけられ、壺の中を直視する格好をとらされた。小男だと侮っていたが、物凄い握力だ。まるで拷問の責め苦のようであった。

「……いずれにせよ、あんたは死ぬとき、この夢の壺を、かかえていかなければならないんだ。この魂の負債、阿頼耶壺は、どこまでもついて回る。未来永劫、生まれ変わり死に変わり、どこまでもどこまでも、魂の影のようにな。決して無に帰することはない。自分の紡いできた夢だから、どうしようもない」

後頭部を押しつけられた苦しさの中で、薄目を開く。壺の中に、真珠色の層を透かして、江戸期の彩色絵皿のような美しい渦が、流動していた。

底知れぬ闇の宇宙に、万華鏡のような幻像が、右から左から濁流のようにならねている。渦の中心には、搾り出すような悔恨が、黒い蛇のような筋を引いて昇っていった。私がこの壺の中にすっぽりと入り込めば、一切が解けると同時に、私自身も永遠に消滅するように思われた。それは、宇宙の叡智としての昇華なのか、虚無への回帰なのか。世界の果ての氷壁の崩壊を目撃したような、鉦物的恐怖を感じた。

突然、私は力の限りの大声をあげて、老人を突き飛ばした。

次の瞬間、私は、何か水流のような力に乗って、ひゅるひゅると急速に収縮した。

気がつくやうに、ベッドに横たわっている。私はベッドの脇でシーツを握りしめ、がたがたと震えていた。肉で出来た身体が、無骨に、鈍重に感じられた。

激しい動悸で、呼吸も荒くなっている。胸や脇の下には、じつとりと嫌な汗が滲んでいる。（馬鹿なやつだ。悟れる直前だったのに。あと、二千年はそうやって、愚かしくこの世を彷徨っているんだな）

脳の裏側に、酸味のある感覚が滲み出し、そんな唸れ声が響いてきた。

（すべてはお前の意識の練り粉で作られたのだ。この私も、あの女も、この世界もな……）

こびりつくように忌まわしい声が響いていた。私は中腰になってよろよろとベッドに座り、がっくりと頭を垂らした。しばらく茫然としていた。変な姿勢で寝ていたせいか、腰が痛む。その日は体が痺れてほとんど動けず、ひたすら放心したように白い天井を眺めているだけで、何もできなかった。

*

正月も、終わりに近づこうとしていた。

塾の授業はすでに始まっていたが、もはや煩わしいだけであった。ちょっとしたことで別のことを考えてしまい、生徒にすら注意される。すでに私は、心身ともに退化しつつあるようだ。

一月最後の日曜日の朝、いつものように団地のベランダに出て新聞を読み、タバコをふかす。奥のキッチンでコーヒーを沸かし、テーブルに少しこぼす。

時折フリーマーケットを開いている、公園の樹木に囲まれた一区画が、遠目に見える。楠の幹の柔らかな褐色が目には快い。正月の白っぽい住宅街の風景が見えた。昨今は不景気で、昔のように門松を立てている家も少ないようだ。

日が昇り、日が沈む。

私の隠者のような生活の中で、何かが変わったのだろう。

あの夢はいったい何だったのだろう。いつか、この世の秘密の仕組みが明かされる——それは私の妄想なのだろうか。

その昔、私は傲慢にも、多くの人々の生き方は、根底から間違っているのではないかと秘かに思ってきた。この世は探究の場であり、その回答も用意されているのに、目先の幸福という牧場の餌に囚われて、いつしか探究をやめてしまう。そこにあるのは、牛や羊のように、草をはみ、反芻するだけの毎日だ。しかし本当は、牧場の柵の向こうに、われわれ自身の正体が解き明かされる、魔法の瞬間が控えているのではないかと。「われわれは、どこから来て、どこへ行くのか」というポール・ゴーギャンの遺した言葉を想う。放浪の画家を悩ました主題、われわれの正体は何者で、その究極においては、何になりうるのか。最後に私が迎えるであろう孤独死（ほとんど確信している）の直前までに、記憶や意識や情動の根底にあるものを見極めなければ、この迷いの中で、永遠に何者かに悪夢を連続上映されるだけなのだ。それだけは、歴然としているように思われた。

親類たちが二組ほど、年始の挨拶に来た。

私は愛想良く迎えつつ、年賀状を出さなかったことを弁解した。彼らは妻の仏壇にお参りすると、そこそこに帰っていった。彼らの謎めいた冷ややかな笑みが気にかかり、早く独りになりたいと願った。

その日、午後になってから、冷たく白い小さなものが、ベランダに舞い降りてきた。

そういえば、朝の天気予報では、雪が降るといっていたようだ。膝の先から、底冷えがしてくる。

私はファンヒーターの温度を上げて、キッチンで紅茶を沸かす。

妻の写真をじっと見つめた。三十年ほど前のある初夏、伊豆に行ったときの写真だ。大きなサボテンとバナナの樹を背景にして、律子が微笑んでいる。妻の被った白い帽子が、強い陽射しにめくれあがったようになっていて、顔に深い影が隈取っている。私には、その濃すぎる影が死の兆だったように思える。

そういえば、あの乳房に巣食った薔薇と蠍の幻も、奇妙であった。

かなり後になってから、律子は痛みに耐えきれず、ハルステッド療法という外科手術を行った。乳房はもちろん、大胸筋や脇の下のリンパ節も除去した。リンパ液の流れが阻害されるため、腕全体がむくんだり、他人の手のような鈍く不快な感覚になる。亡くなるまで妻は、そんな後遺症に悩まされた。私は、肋骨が浮き出た無惨な手術跡を見せられた時のショックを、忌まわしい幻に変容させたのかも知れないとも思う。

妻の死後、私自身こそが、何年間も夢の欠片のような希薄な存在でいたのかも知れない。幽霊

とは、他ならぬ私自身のことだ。私は、ひょっとして、あの日死んだのだろうか。よく思い出して見ると、ベッドに朧気に影が見え、何者かが横たわっているようにも思われた。こんな優柔不断な男だから、あの不吉な黄色い本にも出くわしてしまったのだ。二組の親類たちも、本当に尋ねて来たのだろうか。

——たまには、モーツァルトをかけてください——

私は、はっとして膝を打ち、オーディオに向った。ほとんど聴かないクラリネット五重奏曲を奥から出して、スイッチを入れた。肉感あるクラリネットの響きが、ゆっくりと煙のように燻り出て、黄色い室内光線を彩った。やがて透明な弦楽器の音が、クラリネットに艶っぽく絡んでゆく。私は紅茶の美しい赤味を、じっと見つめた。茶碗が両掌に、熱い。

ふと見ると、褐色の古本がそこにあった。

『鄭家直伝 夢壺秘法』

私は怒りの発作を起こし、書物を投げ捨てた。

「なんだい、こんなもの！」

本は乾いた枯葉の束のように、散っていった。

しかし、落ちてばらばらになった本を眺めていると、妙な考えが浮かんできた。

ことによると、道士を称する鄭英峰とは、元軍事探偵の高木直親その人であり、生前から幽冥境に迷い、その死後は、中有の片隅でアラヤ壺を管理するあの小さな醜悪な老人と成りはてたのではないか。己の書いた本の囚人になるということは、ありそうな話だ。すべての著作とは、新たな迷妄を作る罪業在なのかも知れない。あの猿のような化け物は、間違っただけで異世界に紛れこんできた新参者を、壺への囚われ人とすべく、手練手管でさまざまな幻覚を繰っている脱衣婆のような存在なのか。それは、世界の真実が見えると称しながら、その実、新たな生臭い子宮へと魂を吸引するだけの悪意ある罠なのだ……。

クラリネット五重奏曲が終わって、しんとしていた。不安が忍び寄る。

私はすでに一度死んでしまい、幽霊として再びこの世に戻ってきた者なのだろうか。

これはいけない。外の世界に行こう。私自身を、確かめるために——

少しだけ開いている黄緑色のカーテンから、淡い冬の陽射しが斜めに差し込んでいる。私は青黒い不安を追い払うようにして、外出の支度をし、奥の引き出しにしまっているカシミアのマフラーを首にかけた。そこはかたない妻の体温と吐息を感じた。

階段を下りて、団地の家庭菜園の中の遊歩道を抜けていく。遅い初詣の家族連れが、外の舗道をお喋りをしながら通り過ぎる。二人の女の子の振袖姿が、鮮やかだった。蜜柑色と紺色の絢爛とした色彩が、花びらがこぼれ落ちるように、道端に振りまかれた。履きなれていない草履のためか、歩き方もぎこちなくて可愛いらしい。そのくせお喋りだけは小鳥のように賑やかだ。二人を追いかけていく小さな子犬。生きていることの温もりが伝わってくる。

冷たく白い小さなものが私のうなじに触れた。雪だった。膝の先から、底冷えがしてくる。

長年通い慣れている床屋の窓ガラスに写った自分を見て、ぞっとした。血の気を失ったそいつは、半ば幽霊と化していた。

正月早々、カシミアのマフラーをした老いぼれのお化けが、付近の子供たちを怖がらせなけれ

ばよいものだ。そんなことを思った途端、喉の奥から絞り出すような乾いた笑いが、しきりに込み上げてきた。

(了)

アラヤ壺奇譚

<http://p.booklog.jp/book/23860>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23860>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23860>